

國學院大學学術情報リポジトリ

嵯康「ト疑集」管窺

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-03-26 キーワード (Ja): 嵯康, ト疑集, ト居, 問答, 非道家 キーワード (En): 作成者: 石本, 道明 メールアドレス: 所属:
URL	https://k-rain.repo.nii.ac.jp/records/2000250

嵇康「卜疑集」管窺

一、前言

嵇康の「卜疑集」は、その文体様式の相似から、楚辞「卜居」を擬する作品とされる。しかしながら、私見では、その外形的特徴を主眼として、〈問答文学〉の系譜に連ねる見解には、些か躊躇を覚える。

本稿では、「卜疑集」の特質を文学発想の視点から論じることとする。底本は、『嵇康集校注』（戴明揚校注・中華書局・中国古典文学基本叢書）を使用する。

二、嵇康の生涯

嵇康（二二三―二六三・校注・戴明揚説）の生きた魏晉という時代は、読書人受難の様相を呈する。その社会は、

石 本 道 明

一言で言えば騒擾の時代であって、精神的動揺と恐怖に苛まれる読書人たちは、前時党錮の禁に於ける処世と同様、用晦保身（士大夫處亂世、用晦保身之法也。『廿二史劄記』）を強いられ、現世に対する深刻な懷疑思想を生むに至る。嵇康の「卜疑集」は、その時代の激越な変相に翻弄されながらも、自己に向き合う誠実な営為を反映した作品と捉えられる。その表現には、嵇康の思惟の彷徨と矛盾を極める錯綜した世界観を看取できる。そして該篇は、嵇康の生涯と人間性を考察する場合、示唆に富んだ資料足り得よう。しかしながら、嵇康研究に於て、「卜疑集」の専論や考究は、日本諸家の数篇が重要であるが、戴明揚『校注』の「卜疑集」所引は、張運泰説のみであって、他の諸家説を欠くのは、他の作品に比してやや奇異な印象である。

ここで、嵇康の生涯に触れておきたい。嵇康は、「竹林七賢」として高名であるが、妻は、曹操を父とする沛穆王曹林の孫娘・長樂亭主で、魏王室とは姻戚関係に在る。彼が中散大夫を贈られたのは、一十二・三歳の頃であつた。魏末の様な権謀の世に、官途に在れば、その閉じられた世間に無数の陥穿が準備されていよう。その中であつて所謂隱遁とは、不測の禍變から我が身を守る「保身」でもあつた。

その姿勢を、仕官からの逃避と見れば、その當為は消極的処世であり、一方で官途を全く視野から削除し去れば、真に積極的処世と言えよう。しかし、読書人を自認する人々が、自己承認を世に求めず、官途の榮辱得喪を全く無視した精神を持続するのは、容易な事とは思えない。もし、真の隱遁の処世が可能であるとすれば、それは觀念の世界に於てであつて、正に「無翼の飛翔」でしかあり得まい。挫折した読書人が余儀なくされた隱遁とは、その視野に常に官途が見え隠れする逡巡の中に在つたと思われる。この姿勢こそが読書人の隱遁の一般的傾向であらう。そうだとすれば、嵇康は官途と隱遁の間に逡巡し苦悶する、読書人の負うべき必然を体した代表的人物と言えよう。嵇康は刑死する前に、獄中で草したとされる「幽憤詩」で、「好を老莊に託し、物を賤しみ身を貴び、志 朴を守るに在り、素

を養ひ眞を全うす（託好老莊、賤物貴身、志在守朴、養素全眞）」とは歌うが、その表明が觀念的に完全であればある程、現実的処世の苦悶が思われてならない。そうした嵇康が、「養生論」で「無爲自得」を説くも、司馬昭・鍾会等の陥穽に嵌り、吕安事件に託つけられて刑死するのは、何とも理不尽な悲運に見舞われた四十歳の最期であつた。

三、嵇康の非「純道家」的側面

次いで筆者の嵇康觀を示すために、嵇康を「純道家」と見做した過去の諸説を一瞥しておきたい。

嵇康が魏王室と姻戚關係を結んだことは前項で触れたが、これは反司馬氏の行爲と見做されようし、司馬氏側に立つ当路の者の憎惡の念を増幅させもしよう。しかしそれは、刑死に至るあくまで与件であつて、「毎に湯・武を非とし、周・孔を薄んず（每非湯・武而薄周・孔）（湯王・武王を譏毀し、周公旦・孔子を輕侮する）」（與山巨源絕交書）と放言した事實は、政權の価値の根源として機能した儒教（礼教）を非とする言説であつて、司馬氏の統治下に於て宸怒されるべき対象であつた。儒教の聖人を譏毀することは、現実社会に於ては、司馬氏の造為した体制自

体への強烈で直接的な攻撃でもあったからである。この儒教譏毀の言説が、友人の呂安の事件を奇貨として、処刑されたと伝えられる所以でもある。「無爲自得」（養生論）を自認する嵇康が、たとえ冤罪であろうとも、死罪を蒙る口実を相手に易々と与える体制批判的言説を為すのは、如何に理解すべきなのだろうか。嵇康の精神的均衡を失ったかに見えるこの譏毀は、私見では、現実社会に真の儒教的倫理が施策として活かされることなく、欺瞞に満ちむしろ蔑ろにされる体制への批判と捉えるのは、甚しい誤謬であろうか。

かつてドナルド・ホルツマン氏 (Donald・Holzman)^② が、「嵇康は、かくて、その短い生涯が、道との永遠不滅の合一を達成する手だてを見出そうとする努力に費された純粹道家である。彼の哲学は、純道家的靈感を帯びている。……」と論断した。果たしてそう理解できる側面が嵇康にあり得るであろうか。

いつの時代にあっても、優れた思想家と評される多くの人々は、自ら核心的問題と位置付けた疑問に應えるに当っては、普遍性と説得性を追求して苦闘するはずであろう。嵇康は、自己が生活する時代を、墮落した道德と政治の結果生み出された騷擾の時代と見切り、古代的調和の回復を

冀求したかに見える。その限りに於て、道家的とは評し得るが、理想的古代世界の回復つまり復古的主張は、同時に儒家の主唱する世界でもある。したがって、古代的世界の回復を以て道家者流とは言えまい。

前節のように、嵇康に「純道家的」な影を見るのであれば、「卜疑集」のような懷疑発想を基底とする文学作品を生み出すのであろうか。「卜疑集」には、自己の苦悩と逡巡が吐露され、呻吟が表出されているのであって、脱世間的で惑いのない「純道家」とは懸隔した発想なのである。更にまた、「卜疑集」中の宏達先生の為人として描かれるのは、「超世獨歩、懷玉被褐」である一方、「常以爲忠信篤敬、直道而行之」という側面も併せ持ち、その点では道儒混淆の人物として捉え得る。そうだとすれば、宏達先生は、脱世間的存在と成り切れぬ人物像となり、道家・儒家の狭間で苦悶し続けた、誠実に過ぎる生真面目な存在と評し得よう。もっとも、「超世獨歩」可能な人物が、逡巡に満ちた「卜疑集」など草するはずもあるまい。

読書人の概ねは、所詮体制に付くか否かの処世、思想的には儒家か道家かの処世を基本としよう。しかし、読書人たりせば、そのいずれの処世を選ぶにしても、苦悶と逡巡は常に付き纏うはずであるし、特に道家的処世の有りよう

には、自制と韜晦性が求められる。己が身を寄せた体制の崩壊は、常に人生の自滅を強いようし、將た体制の外縁で疎外者を装つても、事態は同様であろう。したがって、いずれの処世を選ぼうとも、世に完璧な保身などはありません。まして方外人（疎外者）たり得ない読書人の思想的営為は、崩壊に至つた社会に於ては、一層の危険をその一身に招くことになるのは、数々の歴史的事件に徴するまでもあるまい。そうした社会状況こそが、騷擾の時代なのであつて、その時代に遭つた読書人は、屢々複雑な屈折を示し、且つまた韜晦性を帯びるため、決して直截的表現は取らない。

前掲のように、嵇康は、「與山巨源絶交書」で「每非湯武而薄周孔」と放言したが、湯王・武王・周公旦・孔子は、当時としても従來の聖人としての權威の保持に加え、現政權・司馬氏が殊更に昂揚した「政治的存在」としての機能をも有した。これに対して激越な儒教批判となるこの言説は、その反儒家的姿勢として捉えられ易い。ところが嵇康は、「管蔡論」では、武王・周公旦を聖人視して弁証し、また「難宅無吉凶攝生論」では「故に夫子は來問に答ふるを寢め、終に神怪を慎しみて言はず（故夫子寢答于來問、終慎神怪而不言）」と、ここでは孔子を「夫子」と尊

称した上で、「時日譴崇、古盛王無之。季王之所好。聽此言善矣。顧其不盡然。湯禱桑林、周公秉圭、不知是譴崇非也。」⁽³⁾と言ひ、「必若湯・周末爲盛、辛更思之」として、湯王・周公旦を盛王と認めている。そしてまた、上古堯舜の政を賛美する「六言詩十首」の第一首「惟上古堯舜」に「二人の功德齊均し、天下を以て私親せず、高尚・簡樸・慈順もて、四海の蒸民を寧濟す（二人功德齊均、不以天下私親、高尚簡樸慈順、寧濟四海蒸民）。」と歌う。

この「天下を私親」したのは、司馬氏であつて、堯舜を理想とする嵇康によつて諷諭の対象となつてゐる。また、「太師箴」でも、「先生は仁愛にして、世を愍み時を憂ひ、萬物の將に頽れんとするを哀み、然る後に之に蒞む（先生仁愛、愍世憂時、哀萬物之將頽、然後蒞之）。」⁽⁴⁾と言ひ、「季世陵遲し、體を繼ぎ資を承け、尊を凭み勢を恃み、友とせず師とせず、天下を宰割し、以て其の私を奉ふ。故に君位益々侈り、臣路心を生ず。智を竭くし國を謀り、灰沈せらるるを吝しまず、賞罰存すと雖ども、勸むる莫く禁ずる莫し。（中略）刑本と暴を懲らすに今は以て賢を脅かす。昔は天下の爲にせしに、今は一身の爲にす。下は其の上を疾み、君は其の臣を猜ふ（季世陵遲、繼體承資、凭尊恃勢、不友不師、宰割天下、以奉其私。故君位益侈、臣路生心、

竭智謀國、不吝灰沈。賞罰雖存、莫勸莫禁。(中略) 刑本懲暴、今以魯賢。昔爲天下、今爲一身。下疾其上、君猜其臣。」と言う。ここに在る言説は、世の溷濁を激しく非難し深刻な憂懷を吐露したもので、用晦や隱遁と言った処世とは程遠い。

嵇康は、道德・倫理の確立した儒教社会と、理想的為政者像を示して飽くことがない。これらの言説は、明示的に儒教社会の招来を冀求し、仁慈に満ちた聖君への欽慕を表すものであつて、嵇康が反儒家ではないことの明証であらう。彼が「湯・武・周・孔」を非難するのは、嵇康が深考の末に見出した儒教的道を、司馬氏が私意によって歪曲する欺瞞に対してであつて、儒教を為政の手段に墮して省みないその政治姿勢に向けたものであらう。したがつて、嵇康の言説が表面的に湯武以下を非難したからと言つて、直ちに彼を道家者流に位置付けるのは、単純にすぎると思われる。嵇康は「答難養生論」でも次掲のように言う。

且つ聖人の寶位、富貴を以て崇高と爲すは、蓋し仁君貴くして天下と爲り、四海を富せしむるを謂ふ。民は主無くして存すべからず。主は尊無くして立つ能はず。故に天下の爲に君位を尊び、一人の爲に富貴を重んぜざるなり。

且聖人寶位、以富貴爲崇高者、蓋謂人君貴爲天子。富有四海、民不可無主而存。主不能無尊而立。故爲天下而尊君位、不爲一人而重富貴也。

その後に、更に次掲のように言う。

『嵇康集校注』卷四

豈に百姓の己を尊ぶを勧め、天下を割きて以て自ら私し、富貴を以て崇高と爲し、心は之を欲して已まざらんや。

豈勸百姓之尊己、割天下以自私、以富貴爲崇高、心欲之而己哉。

右の言説から、嵇康に「方外人」を読み取るには無理がある。嵇康は、己が生きる時代を「季世」と見切り、儒教的視点を堅持して痛烈な非難を放ったと読むのが妥当ではないだろうか。前引「太師箴」の「宰割天下、以奉其私」や、この「昔爲天下、今爲一身」「不爲一人而重富貴」「不以天下私親」等は、儒教尊崇を標榜しながら、現今のような「季世」を招来させた当路の司馬氏への痛罵であらう。

嵇康のこの激越さは、儒教的理念が、現実社会で全く喪失されている現状への危機意識の昂揚である。「答難養生論」の「穆然以無事爲業、坦爾以天下爲公」とは、『禮記』禮運篇の「孔子曰、大道之行也、天下爲公。」に拠るが、

本来天下を公とすべき儒教の理念が、省みられること無いまま「私天下」・「爲一人而重富貴」へと歪曲され、「刑本懲暴、今以魯賢」と墮している司馬氏体制を非難する。詩文を以て諷することは、「之を言ふ者に罪無く、之を聞く者は以て戒むるに足る（言之者無罪、聞之者足以戒）。」（「毛詩序」）であり、また「之を聞く者、以て違を塞ぎ正に従ふに足る（聞之者、足以塞違從正）。」（「毛詩正義序」）を理念とするが、嵇康の時代は、理念が理念のまま通用するはずのない「季世」であつた。

彼も自説が、司馬氏の逆鱗に触れる予測が立たない程に無垢ではあるまい。むしろ十分に諒解した上での言説であつたことは、「剛腸にして惡を嫉み、輕さしく肆しいまに直言（剛腸嫉惡、輕肆直言）」（「與山巨源絶交書」）という性向や、「佞を恥ぢて直言すれば、禍と相逢ふ（恥佞直言與禍相逢）。」（「秋胡行」其二）との認識によつて判かる。それらの表現は、己が理想とする儒教的君子觀の鮮耀であつたと見るべきで、彼を「純粹道家」とする見解が、いかにも性急な断案と思われ⁽⁴⁾る。

文学及び思想の地平に、己が情念を解き放とうと試みるならば、「方外人」となつて脱世間的に生きる方が、より

安全でもあり自由でもあるだろう。しかし、眞の「方外人」たるためには、現実社会に対する異議を、併せて儒教的理想を打ち捨てると言う苦渋も引き受けなければなるまい。竹林七賢の典型とされる嵇康と言う人物は、「方外人」ともなり切れないまま、実社会への抵抗を抱えつつ、むしろその彷徨する人生を愚直に受け容れ、生を追求し続けた思想家のように思⁽⁵⁾える。魏王室との姻戚關係を結ぶに、いかに老獪な誘拐があつたとしても、こうした關係性を持つことと自体が、彼の人物を象徴していると言えなくもない。或いは「方外」を冀求し、或いは「方内」を革新すべく攻撃するのは、儒・道両思想に飽き足らず、なお高次の理想を追求する苦悶の中に在った人物であつたと言えよう。

四、「卜疑集」全篇の構成

「卜疑集」は、魯迅校訂の『嵇康集』では「卜疑」に作るが、本稿底本では「卜疑集」に作り、今これに従う。

夏明鈞は「卜疑集」の制作年代について、「筆者疑（卜疑）一文当作于魏嘉平三年（公元二五二）至魏嘉平五年（公元二五三）之間」とする。嵇康が、己が人生の指針に迷い、岐路に在つて解き難い逡巡に陥つた時期と考えられるから

である。

次に「卜疑集」の論を進める便宜として、全篇⁽⁶⁾の訓読を示したいと思う。

〈第一段〉

宏達先生といふ者有り。恢廓（広量たる器度）たる其の度、寂寥疏濶なり。「方なれども制せず、廉なれども割かれず、超世獨歩して、玉を懷き褐を被（着る）、交はるも苟合（他人に迎えられようと諂う）せず、仕ふるも達（宦達）するを期せず、常に以て忠信にして篤敬、直道にして之を行ふと爲し、以て九夷に居り、八蠻に遊び、滄海に浮かび、河源を踐むべし。甲兵忌むに足らず、猛獸患ひと爲さず。是を以て機心（企み詐る心）存せず。泊然純素、從容として縱肆し、好惡を遺忘し、天道を以て一指と爲し、品物の細故を識らざるなり。然れども大道既に隠れ、智巧滋々繁く、世俗膠加（厳しく）、人情萬端（乱れ齊わない）なり。利の在る所、鳥の鸞を追ふが若く、富むは積蠱と爲し、貴きは聚怨と爲す。動く者は累（災難）多く、靜かなる者は患鮮し。爾乃ち丘中の隱士を思ひ、川上の執竿（魚釣り）を樂しむ。是に於て遠く念ひ長く想ひ、

超然として自失す。郢人（屈原）既に没し、誰か吾が爲に質^{ただ}さん。聖人は吾れ見るを得ず、冀はくは之を數術に聞かん。乃ち太史貞父の廬に適^あきて之を訪ひて曰はく、吾れ疑ふ所有り、願はくは之をトセよと。

〈第二段〉

貞父乃ち危坐（居り直し）して著を操り、几を拂ひて龜を陳^つねて曰はく、君何を以て之に命ぜんと。先生曰はく、

1 吾は寧ろ憤を發して誠を陳べ、帝庭に讜言して、王公にも屈せざるか？

2 將^はた卑懦委隨して、旨を承け倚靡し、面従を爲さんか？

3 寧ろ愷悌して弘く覆ひ、施して徳とせざるか？

4 將^はた進みて世利に趣き、苟容儻合せんか？

5 寧ろ隱居して義を行ひ、至誠を推さんか？

6 將^はた矯誣を崇飾して、虛名を養はんか？

7 寧ろ凶佞を斥逐し、正を守りて傾かずして、否臧を明らかにせんか？

8 將た傲倪滑稽、智を挟み術に任じて、智囊と爲らんか？

9 寧ろ王喬・赤松と侶と爲らんか？

10 將た伊摯を進めて尚父を友とせんか？

11 寧ろ鱗を隠し彩を藏して、淵中の龍の若くせんか？

12 將た翼を舒ばし聲を揚げ、雲間の鴻の若くせんか？

13 寧ろ外は其の形を化し、内は其の情を隠し、身を屈し時に隨ひ、陸沈して名無く、人間に在りと雖も、實に冥冥に處らんか？

14 將た激昂して清を爲し、銳思して精を爲し、行は世と異なり、心は俗と并はせ、在る所は必ず聞こえ、恒に營營たらんか？

15 寧ろ寥落開放にして、矜尚する所無く、彼我を一

と爲し、争はず譲らず、心を皓素に遊ばしめ、忽然として坐忘し、義農を追ひて及ばず、中路に行きて惆悵せんか？

16 將た慷慨以て壯を爲し、感槩して以て亮を爲し、上は萬乗を干し、下は將相を凌ぎ、其の容を尊嚴にし、高く自ら矯抗し、常に職を失ふが如く、恨を懷き怏怏たらんか？

17 寧ろ貨を聚むること千億、鍾を撃ち鼎食し、枕藉芬芳として、美色に婉嬖せんか？

18 將た身を苦しめ力を竭くし、荆棘を剪除し、山居谷飲し、巖に倚りて息はんか？

19 寧ろ伯奮・仲堪の如く、二八を偶と爲し、共・鯀を排擯し、所を失はしめんか？

20 將た箕山の夫・白水の女（潁水の父）の如く、唐・虞を輕賤して大禹を笑はんか？

21 寧ろ泰山の隱徳の如く、潜讓して揚らざるか？

22 將た季札の節義を顯はすが如く、慕ひて子臧と爲らんか？

23 寧ろ老聃の清淨微妙の如く、玄を守り一を抱かんか？

24 將た莊周の齊物變化の如く、洞達して放逸せんか？

25 寧ろ夷吾の束縛を恠せざるが如く、終に覇功を成さんか？

26 將た魯連の輕世肆志するが如く、高談從容せんか？

27 寧ろ市南子の神勇の如く、内固く其の志を山淵にせんか？

28 將た毛公蘭生の龍驤虎歩の如く、慕ひて壯士と爲さんか？

此れ誰か得、誰か失、何れか凶、何れか吉なる？

時移り俗易はり、貴を好み名を慕ふ、臧文は位を柳季に譲らず、公孫は美を董生に歸せず、賈誼一たび明主に當たり、絳灌色を作して聲を揚ぐ。況んや今千龍並

び馳せ、萬驥徂き征く。紛紜として交々競ひ、逝くこと流星の若し。敢て惟思して、老成に謀らざらんやと。

〈第三段〉

太史貞父曰はく、吾れ聞けり、至人は（觀）相せず、達人は（龜）トせずと。

先生の若きは、文明中に在りて、見素表璞し、内は心に愧ぢず、外は俗に負かず。交はりは利の爲にせず、仕は禄を謀らず、古今を鑒て、滌情して欲を蕩にす。夫れ是くの如くして呂梁以て遊ぶべく、湯谷以て浴すべく、方に將に大鵬を南溟に觀んとす。又何ぞ人間の委曲を憂へんや。

以上が「卜疑集」の構成・訓訳である。この全容を踏まえて、次項では文学發想及びその系列について論を進め、その後項でこの内容に関して論じる。

五、「卜疑集」と楚辭と

嵇康の「卜疑集」を検討すると、騷擾の時代に逢着した

読書人の思想的葛藤や逡巡、苦悶に満ちた彷徨を読み取ることが可能であろう。勿論思想史の視座からの検討が重要であることは言を俟たないが、筆者は尚お楚辭との關係性を、文学系列の側面から論じてみたい。それは、「卜疑集」が文学様式から見れば、明らかに楚辭「卜居」形態を踏襲し、そこに文学の系譜を辿ることは、当時の人士が、「卜居」を想起しつつ、この作品を受容したと容易に考えられるからである。その分析を進めるに当っては、後述のように、藤野岩友博士の提唱された学説（以下、師説）を通して考察するのが早道かと考える。それは、この作品の第二段落に見える選択疑問の表現の内に、連問発想が看取され、更にそれはこの「卜疑集」が、卜辭を原委とする系列の中に、位置付けられるからである。

卜辭を原委とする〈占卜文学〉は、後にいわゆる「設問文学」と「問答文学」とを生み出すに至る。その両文学は、文学発生論の観点から考察すれば、無論同源のものと言える。したがって、異なる二種の卜辭が、「設問文学」と「問答文学」を発生させたのではなく、占卜の懷疑発想が、より先んじて「設問文学」を、より遅れて「問答文学」を発生させる道を辿ると解されるのである。この二種の文学が同源であることは、師説に於て、「設問文学」に〈卜問系

文学〉、「問答文学」に〈占卜系文学〉と付記されていることによって明白である。^⑦

したがって、嵇康「卜疑集」が、同源であるが故に、そのいずれの文学系列に連なるべき作品であるかは、議論が分かれるところであろう。

この「卜疑集」について、張運泰は次のように注する。

機軸に屈平の「卜居」を胎せしめ、而して玄致素衷、冲靜間放なること、則ち廣陵一曲の如く、聲調絶倫たり。

機軸胎于屈平卜居、而玄致素衷、冲靜間放、則如廣陵一曲、聲調絶倫。

〔嵇康集校注〕卷三所引

右のように讃辭を以て評し、「卜疑集」の先行作品の範たるものとして、楚辭「卜居」を挙げる。諸家の言及も概ねこの張説に近く、例えば、嚴可均は「案ずるに此れ「卜居」に擬す（案此擬卜居）」（『全上古三代秦漢三國六朝文』「全三國文」卷四十七）と言ひ、夏明釗が「卜疑的形式、明顯濫觴于屈原的卜居」（『嵇康集詁注』解題）とする。これらは、「卜疑集」と「卜居」の連問部分が、後述するように同型であり、また「卜疑集」の

吾れ疑ふ所有り、願はくは子之をトせよ。

吾有所疑、願子卜之。

と、「卜居」の

吾れ疑ふ所有り、願はくは先生に因りて之を決せよ。

吾有所疑、願因先生決之。

との序が、踏襲されていることも重なる。したがって右掲のように諸家が一様に〈卜疑集＝卜居〉と捉えるのであれば、「卜疑集」は当然「問答」であって、師説「問答文学」の系列に置くことになる。しかし、「卜居」と「卜疑集」は、外形の類似を以て同系統の作品として位置付けて問題はないのだろうか。

ではその考察に先立って、楚辞「卜居」の構成を示そう。

〈卜居〉の構成

A〔叙事〕…序に当たる部分

←

B〔問答〕…稽問者屈原と太卜鄭詹尹

←

C〔連問〕…寧く乎、將く乎 十八条↓↑

←

D〔意思の確定〕…屈原の意思の確定

←

E〔最終的答弁〕…占断の放棄↑↑↑↑↑↑↑↑

藤野 説

右の構成では〈C〉↓〈E〉の展開に留意すべき点が存する。藤野説では、〈C〉↓〈E〉に直接結びつけて図式化されているが、子細に内容を分析すれば、〈D〉の要素の存在が認められよう。

〈C〉の「連問」の直後の〈D〉は、第二段落の結末部分である。それは、

世溷濁して清まず、蟬翼（世に不要な軽薄人）を重しと爲し、千鈞（世に不可欠な重要人物）を輕しと爲す。黃鍾（偉大なる人物）を毀棄し、瓦釜（小人）を雷のごとく鳴らす。讒人は高く張り、賢士は名無し。吁嗟黙然たらん。誰か吾の廉貞を知らんや。

世溷濁而不清。蟬翼爲重、千鈞爲輕、黃鍾毀棄、瓦釜雷鳴。讒人高張、賢士無名。吁嗟黙然兮誰知吾之廉貞。

とあって、自矜を以て結んでいる。〔楚辭章句〕卷六「卜居章句第六」

これは、自己の正当性の披瀝、自己肯定の強烈な発露であって、〈連問の後の反語化〉という構成となる楚辞「天問」の発想に酷似する。その後に置かれた〈E〉は、占筮者の最終的答弁であるが、太卜・鄭詹尹は、稽問者・屈原の質問の形式は採るものの、それが執拗に連問されることで、激しい自己主張となっていることに譲って、「策を釋

てて謝（辞退）して（釋策而謝）、「寧（乎）將（乎）」の選択辞退を以て占断を放棄する。

それに対して、「卜疑集」の太史・貞父は、占筮を放棄してはいない。所謂〈連問文学〉は、その発想の原委は、懷疑を記した最古の言辞として卜辞に溯る。そして、卜問や祝辞（禱辞）等と、それらに対する神意の啓示が併記されることで、〈問答文学〉の原初的様式は構成される。つまり、〈人から神へ〉の卜辞による懷疑の表出と、〈神から人へ〉の繇辞が神意として啓示されることで、〈問〉と〈答〉との併立が漸く成るのである。

では、「卜居」の構成を承けて、「卜疑集」の連問〈C〉の部分について検討しよう。「卜疑集」の連問部分は、

寧……a……乎？ 將……b……乎？

「卜居」の連問部分も

寧……a……乎？ 將……b……乎？

と、両篇共通の形態である。「卜居」に於ては、屈原が鄭詹尹にa・bいずれを選択すべきかを問う。しかし、連問を繰り返していくうちに、構成〈D〉に至って、問aの正しさを強調するに至るのである。これは、連問の結果、自己の確信を得るという発想である。句法としては、「連問」が続いた後の断定・反語化である。この発想の構成が、「天

問」の構成と酷似するのである。つまり、二百七十余の質問が連続して〈連問〉となるだけの形態の「天問」ではあるが、連問↓断定・反語化という発想の構成に着眼すれば、形態は〈問・答〉をとるにせよ、「卜問」が「天問」の〈連問〉主体の発想と同質であると言えよう。

「卜疑集」には、「卜居」の構成〈D〉に相当する部分がない。これは、作品の修辭上の、或いは單純化による輕微な問題なのであろうか。つまり、單なる「卜居」の簡略化・省略形であつて、論ずるに足らない変化であらうか。しかし、構成〈D〉部分は、連問の果てに得られる自己の意思の確定であつて、混惑を抱懷して竟に占卜に委ねようとした過去の自己との訣別でもある。これが無ければ、構成〈E〉の占断の放棄は有り得ない。この発想を欠く「卜疑集」は、單純にその表現形式を以て「卜居」の後継とはなり得ない。むしろ、この変容を、嵇康の思考の新意と評すべきであろう。

「卜疑集」の宏達先生は、己が人生を最後まで迷ひ抜き、処世を太史貞父の占断に委ねようとする意思のみが確定している。それは、第二段落末尾に「敢て惟思して老成に謀らざらんや（敢不惟思謀於老成哉）」とあることで明らかである。また、「天問」と「卜居」との異同は、連問が二

者択一・選択疑問となつて複雑化した点であるから、その点に於て、前述した通り、「卜居」との類似を指摘することには異議はない。しかし、それによつて、「卜居」と「卜疑集」の決定的な差違を指摘しないことは、許されない。「卜居」に於て、a・bの択一は、儒・道の有様が極めて明白であるのに対して、「卜疑集」には、思想的混迷が刻み続けられ、択一が明白に為し得ない連問なのである。つまり、「卜問」のように、択一形態に借りて自己の確信を定立する作品と、「卜疑集」に於て、択一設問を択一できないまま、自己の安寧からより遠ざかつてゆく作品は、その差異は決して小さくはない。またその差異こそが嵇康の独自性（新意）であり、それを前提として嵇康がこの作品に託した意思を論ずべきと考える。

「卜疑集」が即ちに「卜居」の継承足り得ないことはここまで述べた通りである。稽問者の意思の確定を欠くことは、「卜疑集」を「卜居」に見られた〈問答文学〉と定義づけることの不可能を意味する。これについて、この「卜疑集」を「問答」ではなく、その本質を「設問」に見ていた言説として、明・張溥編『漢魏六朝一百三名家集』は、「嵇中散集」〈說難〉の項に「卜疑集」を収録する。〈說難〉と

は、「其の辭を鋪設し、以て難を發す（鋪設其辭、以發難）」（『資治通鑑』「漢紀」順帝注）である。この〈說難〉とは、「問難を設ける」ことであり、「問答」形態ではなく、「問う」という行為自体に主体がある（設問）の発想である。張溥もあるいは「卜疑集」を〈設問文学〉と認めるかのようである。

筆者は「卜疑集」を、懷疑思想を基底に抱く〈設問〉を主体とし、〈問答〉形態を借りつつ、自己の思想的懊悩を吐露した複雑な文学作品であらうとみている。

六、「卜疑集」に見える思想的彷徨

溷濁の現実社会に逢着した読書人は、概ね韜晦を旨として生きることを強いられる。ところが、嵇康はその韜晦に徹し切れずに煩悶し、その逡巡を振り出すようにして、鬱結錯節した自己の心情を、「卜疑集」に凝縮させた感がある。それだけに「卜疑集」の思想的多岐性には、刮目せざるを得ない。筆者は本稿前項で、嵇康を「純道家」と規定したり儒・道一方に偏する思想傾向ではない旨を論述したが、ここで「卜疑集」の内容から、彼の思想的彷徨の若干を摘出して検討してみたい。

「卜疑集」の第一段は、「有宏達先生者、吾有所疑、願子卜之」であるが、この段には創作意図を窺知せしめるものがある。嵇康が時代の不確実性に翻弄されている状況を、宏達先生の口述に借りて語らせるのであるが、この冒頭部分は、「誇尚」の発想が強い。しかし、「世俗膠加、人情萬端」たる世の趨勢に、隱遁への羨望を表明して「思丘中之隱士、樂川上之執竿」と言い、我が身の処世を占断に委ねようとする。この「世俗膠加、人情萬端」の世でなければ、嵇康は、当然「宦仕」の社会に在りたいと欲していたに相違ない。

つまり、儒家としての生を全うすることが、あまりにも危険に満ちた、司馬氏の主宰する欺瞞的儒家社会では実現不可能であることを知悉し、消極的に老莊的韜晦の中に追いつ込まれてゆく読書人の姿が、彼に占断を選ばせたのであらう。

嵇康には「與山巨源絶交書」で「老子、莊周は吾が師なり」と、道家を標榜する表明もある。ところが、連問第五条「寧ろ隱居して義を行なひ、至誠を推さんか（寧隱居行義、推至誠乎）」は、『論語』季氏篇「隱居して以て其の志を求め、義を行なひて以て其の道を達す（隱居以求其志、行義以達

其道）。」や、『禮記』中庸篇「惟だ天下の至誠、能く其の性を盡くすを爲す（惟天下至誠、爲能盡其性）。」等に拠り、儒家的行世への思慕も断ち切れないままに述べている。

連問第十五条「彼我をひと爲し、争はず讓めず……心を皓素に遊ばせ、忽然として坐志し」は、『莊子』齊物論篇の「萬物與我爲一」や大宗師篇の「墮肢體、細聰明、離形去知、同於大道、此謂坐志。」等に拠る。ここでの「坐志」は、自己も現実も忘却することで、只管天地自然のそのまに在る働きに、あるがままに委せ、「天地の一氣に遊ぶ」という絶対者の境地とひとまず解しておく。そしてまた前者は、齊物思想であつて、これは、現象に捉われた主観に偏した判断を棄却し、専ら根源的で唯一の理法に因り循つて行くとする「因循思想」でもあらう。それらの思惟からは、「死生一如」の諦念も、「胡蝶の夢」の世俗超越の觀念も、容易に嵇康の思索へと取り込まれていったであらう。

つまり、嵇康の老莊理解は、それが己の生を賭けた処世に連続してしまつたため、知識上にとどまらず、その選択自体が現実社会に於ける意味を持たせ、ある場合には政治的色彩を帯びさせる懸念すらあるであらう。したがって、單純勁烈に一方を選択することも不可能なまま、各連問の間に選択を逡巡しながら彷徨する姿が見出されよう。第十六

条の「常に職を失ふが如く、恨を懷きて快快たらんか」は、楚辭「九辯」の「貧士失職而志不平」に拠るように、いわゆる賢人失志の心情が吐露され、未だ「宦仕」の社会への執着を見せている。これは前掲第十五条の莊子の処世と対立する。

また、連問第二十条「將た箕山の夫・白水の女（潁水の父）の如く、唐・虞を輕賤して大禹を笑はんか」は儒教の聖人に対する輕侮であり、妻々引用してきた「非湯武薄周孔」と軌を一にする。それは、取りも直さず「宦仕」の抛擲も意味しよう。

では、「老莊を師とす」と表明した嵇康は、道家思想を一元的価値と認識する粗放さの中に在ったのだろうか。それに関しては、連問第二十三・二十四条の疑義が呈される。

23 寧ろ老聃の清淨微妙の如く、玄を守り一を抱かんか？

24 將た莊周の齊物變化の如く、洞達して放逸せんか？

この二条では、老子・莊子が対峙する。つまり、道家思想として一様一元ではなく、老子・莊子を包摂的に同一視せず、峻別しようとする視座がある。老子流の靜的処世と、莊子流の動的処世とに取えて二分して見せ、しかもその両者にも困惑を隠さず占断に委ねているわけで、たとえ道家

者としての存在を容認しても、彼は未だ躊躇し続けるようである。⁽⁸⁾

第二十三条の老子の処世には、常に世俗的関心、現実的関心が極めて強く、それだけ政治的であるが、第二十四条の莊子の処世は超越的であって、宗教的意味が非常に強く、脱政治的である。嵇康はこの二者の間でも迷いを捨て切れない。理想の処世を、老子・莊子の思想的枠組の中に限って探求することに、儒家の価値を知悉しているだけに、彼に於て思索の動揺を禁じ得なかったのではないだろうか。

この第二十三・二十四条の間辞から窺知できる嵇康像は、複雜多岐（世俗膠加・人情萬端）な不確実な社会に在って、我が身の処世を、内なる自己に対してさえ偽ろうとしない誠実な哲人の姿である。人生に誠実であればある程、懷疑精神は旺盛となり、処世は困迷を極めるからである。

この他に第十三条にもこの動揺は看取される。

13 寧ろ外は其の形を化し、内は其の情を隠し、身を屈

し時に隨ひ、陸沈して名無く、人間に在りと雖も、實に冥冥に處らんか？

右は真に没社会的人間たり得ない、自己への〈設難〉と捉え得る。更に第十四条では、

14 行は世と異なり、心は俗と并はせ

と言いいわゆる「陸沈」なる処世への傾斜が示される。この「陸沈」の語は、『莊子』則陽篇に見えるが、これは、俗世に在って俗世と歩みを異にする処世である。それは〈俗〉に在って〈俗〉を超越する理想的な生であろう。また、『史記』滑稽列傳第六十六「東方朔」にも、「陸沈」の語はある。

朔曰はく、朔等の如きは、所謂世を朝廷の間に避くる者なり。古の人、乃ち世を深山の中に避く。時坐席中、酒酣なるとき、地に據りて歌ひて曰はく、俗に陸沈し、世を金馬門に避く、

宮殿中以て世を避けて身を全うすべし。

何ぞ必ずしも深山の中、蒿廬の下ならん。右の「陸沈」は、漢武帝の盛世であることを見逃してはなるまい。東方朔が「陸沈」の処世を為し得たのは、この武帝治世の安達がもたらした果報であろう。王朝の盛世に、上下秩序が厳然とした儒教支配の下であれば、「陸沈」もまた「朝隱」も可能となる。安定した社会であれば、それに対する隠逸も、迫害される程の危険も無く、その姿勢すら朝政の中に還元される余裕があるからである。

ではこの様な処世が、魏晋の世に、嵇康のような世に知られた読書人に於て可能であろうか。それは言うまでもな

く不可である。

言志・載道の思潮は、前者が道家的であり、後者が儒家的と捉えられよう。その前提に立てば、道家は、元来乱世の思想として生まれたことが判かる。乱世に儒家的載道的主張をすれば、直ちに生命の危機に陥る。それが、魏晋のような偽載道の世であれば、一層の危険が潜んでいよう。この時代の知識人が、己が保身のために、本来志向すべき政治への言説を、文学・芸術の方向に向けたのは、当然の理である。したがって多くの読書人は、心内の真実はどうあれ、老莊へと傾斜し、その際には〈随順〉を選ぶか、〈自適〉を選ぶかの処世しか、現実的生への可能性はない。前者は老子の「自然」への志向であり、後者は莊子の「自適」への志向である。この第二十三・二十四条の選択は、自らの生を保全するためには、最も現実的で、最も切実な選択を迫る。そこには、政治性と非政治性の問題は孕むが、嵇康はそれすら占断に委ねてしまう。この一見不徹底な哲人像は、むしろ嵇康が自己の生き方に誠実で、追求してやまない生真面目さを物語ってもいよう。

筆者は、「卜疑集」は、嵇康が当然の政治的欺瞞を追求し続け、現実社会への深刻な懷疑が動機となって、生み出

されたと思われる。

七、結言

「卜疑集」第三段落の諺語的表現「至人不相」は、『史記』蔡澤列傳「唐筭曰はく、吾聞く『聖人は相せず』と（唐筭曰、吾聞聖人不相。）」に、「達人不卜」は、『左傳』哀公十八年「聖人は卜筮を煩せず（聖人不煩卜筮。）」に拠ったものである。これは、超越者なる者の「相・卜」否定の態度を示すものであり、それを敢えて実行する者は、現実社会への固執者であって、超越に生きる者の行為ではないとする。

楚辭「卜居」は、太卜鄭詹尹が、「枳策而謝」と言うように、こちらは占断の拒絶であるが、「卜疑集」の太史貞父の態度は、これ程強くはない。宏達先生を「至人」・「達人」と評価して、「相・卜」の要を認めなかったに過ぎない。太史貞父は、最後には「方將觀大鵬於南溟、又何憂於人間之委曲」と言い、俗世の下劣で煩瑣な案件に心を悩ませるべきではないと忠告して結ぶ。前句は『莊子』逍遙遊篇「北溟有魚、其名爲鯢、化而爲鳥、其名爲鵬」に拠るが、この「逍遙」とは、一切の人為から解放された自在の境地を言う。そして、「大鵬」は、世俗と次元を異にする世界

（天地）へと飛翔するが、これが「無翼を以て飛ぶ」（人間世篇）と言う觀念の世界での飛翔であった。その中にこそ「至人」が存在し、その処世が成立し得るのである。その「至人」は自意識を投擲して無限の天地に遊ぶ存在である。無窮の世界に逍遙して遊ぶ「至人」は莊子的絶対者であって、その限りに於て非現実的であり、かつ脱政治的である。少くとも世俗的側面を持つ老子的なあり方ではない。「卜疑集」第三条について、夏明釗は『嵇康集詁注』解題で、「写太史貞父的回答、實際上是嵇康本人的自解自慰、夫子自道」と評するのも首肯できる所以である。

嵇康が思想的彷徨の末に漸く探り得た世界は、莊子的処世を冀求する次元に留まるようである。それが即莊子的思想家たり得ないことは言うまでもない。

注

（1）「卜疑集」の專論には、大上正美氏「卜疑」試論（『阮籍・嵇康の文學』第四章・創文社・二〇〇〇年二月）、馬場英雄氏「嵇康の思想」第七章・嵇康における「自得」と「兼善」の問題について―「卜疑集」と「釈私論」―、第八章・嵇康における「名教」問題と「卜疑集」について（明治書院・二〇〇八年三月）、峯吉正則氏「卜疑」（國學院大學『漢文學會々報』第十九輯・

一九七四年二月)、松浦崇氏「嵇康と楚辭」(『中国詩人論 岡村繁教授退官記念論集』・汲古書院・一九八〇年一〇月)がある。

(2) 「阮籍と嵇康との道家思想」(『東方宗教』一〇・一九五六年)

(3) すべて既出「校注」本に拠る。以下同じ。

(4) 堀池信夫氏は「神仙の復活」注64で「……ただし筆者は純粹道家とは思わない」と説かれる。(筑波大学「哲学・思想学系論集」

第五号)

(5) 古くは橋本循氏が『中国文学思想管見』十一「陶淵明の守拙について」で、竹林七賢を「これとて真に隱遁の士と言ひ得るかどうか」と言い、武田秀夫氏も「形は老莊に借りながらも儒家の発想である」と指摘する(『京都産業大学論集』十六―四「嵇康思想の一視点」)。ただし「卜疑集」は、その儒・道の処世にすら疑念を抱くと考へるのが筆者の立場である。

(6) 有宏達先生者。恢廓其度、寂寥疏濶、方而不制、廉而不割。超世獨歩、懷玉被褐、交不苟合、仕不期達、常以爲忠、信篤敬直、道而行之、可以居九夷遊八蠻、浮滄海踐河源、甲兵不足忘、猛獸不爲患、是以機心不存、泊然純素、從容縱肆、遺忘好惡、以天道爲一、指不識品物之細故也。然而大道既隱、智巧滋繁、世俗膠加、人情萬端、利之所在、若鳥之追鸞、富爲積蠹、貴爲聚怨、動者多累、靜者鮮患、爾乃思丘中之隱士、樂川上之執竿也、於是遠念長想、超然自失、郢人既沒、誰爲吾質、聖人吾不得見、

冀聞之於數術、乃適太史貞父之廬而訪之曰、吾有所疑、願子卜之、貞父乃危坐、操著拂几、陳龜曰、君何以命之。先生曰、

1 吾寧發憤陳誠、讜言帝庭、不屈王公乎?

2 將卑儒委隨、承旨倚靡、爲面從乎?

3 寧慢拂弘覆、施而不德乎?

4 將進趣世利、苟容儉合乎?

5 寧隱居行義、推至誠乎?

6 將崇飾矯誣、養虛名乎?

7 寧斥逐凶佞、守正不傾、明否臧乎?

8 將傲倪滑稽、挾智任術爲智囊乎?

9 寧與王喬赤松爲侶乎?

10 將進伊摯而友尚父乎?

11 寧隱鱗藏彩若淵中之龍乎?

12 將舒翼揚聲若雲間之鴻乎?

13 寧外化其形、內隱其情、屈身隨時、陸沈無名、雖在人間、

實處冥冥乎?

14 將激昂爲清、銳思爲精、行與世異、心與俗并、所在必聞恒

營營乎?

15 寧寥落閒放、無所矜尚、彼我爲一、不爭不讓遊、心皓素忽

然坐忘、追羲農而不及行中路而惆悵乎?

16 將慷慨以爲壯、感槩以爲亮、上千萬乘、下凌將相、尊嚴其容、

高自矯抗、常如失職懷恨快快乎？

17 寧聚貨千億、擊鍾鼎食、枕藉芬芳、婉變美色乎？

18 將苦身竭力、剪除荊棘、山居谷飲、倚巖而息乎？

19 寧如伯耆仲堪二八爲偶排擠共鯨令失所乎？

20 將如箕山之夫・潁水之父、輕賤唐虞而笑大禹乎？

21 寧如泰山之隱德、潛讓而不揚乎？

22 將如季札之顯節、義慕爲子臧乎？

23 寧如老聃之清淨微妙、守玄抱一乎？

24 將如莊周之齊物變化、洞達而放逸乎？

25 寧如夷吾之不愜束縛、而終成霸功乎？

26 將如魯連之輕世肆志、高談從容乎？

27 寧如市南子之神勇內固、山淵其志乎？

28 將如毛公蘭生之龍驤虎步、慕爲壯士乎？

此誰得誰失、何凶何吉、時移俗易、好貴慕名、臧文不讓位於柳

季公孫不歸美於董生、賈誼一當於明主絳灌作色而揚聲、況今千

龍並馳、萬驥徂征、紛紜交競、逝若流星、敢不惟思謀於老成哉、

太史貞父曰、吾聞、至人不相、達人不卜、若先生者、文明在中、

見素表璞、內不愧心、外不負俗、交不爲利、仕不謀祿、鑒乎古今、

滌情蕩欲、夫如是、呂梁可以遊湯谷、可以浴方、將觀大鵬於南溟、

又何憂於人間之委曲。

(7) この間の詳説は、『巫系文學論』『設問文学』及び『問答文学』

の項に在る。

(8) 金谷治氏「『莊子』を読む」二「道」の思想。

(9) 仲尼曰はく、是れ聖人の僕なり。是れ自から民に埋もれ、自

から畔に藏る。其の聲銷えて、其の志は窮まり無し。其の口は

言ふと雖も、其の心は未だ嘗て言はず。方に且に世を違ひて、

心之と俱にするを屑しとせず。是れ陸沈する者なり。

仲尼曰、是聖人僕也。是自埋於民、自藏於畔。其聲銷、其志無窮。

其口雖言、其心未嘗言。方且與世違、而心不屑與之俱。是陸沈者也。

「キーワード」 嵇康、卜疑集、卜居、問答、非道家